

ビジネスにしないとリサイクルじゃない！ ヴェラパン

## 高須正和のアジアンハッカー列伝

■技術のチカラで新しいビジネスをすることで持続可能な未来を

今回はまたシンガポールのハッカーを紹介します。

シンガポールの **Maker** グループ、**Sustainable Living Lab**(サステイナブル・リビング・ラボ 持続可能な生活を研究する、の意味。以下は彼らの略称である **SL2** を使います)を運営する **Veerappan Swaminathan** (以下ヴェラパン) です。

日本だと、サステイナブル、持続可能を旗印にする人たちは、なるべく現状を変えなかったり、技術が発展する前の時代を指向する形が多いように思います。**SL2** はそうした活動とはかなり違い、自分たちも”**Maker**”を標榜し、実際にテクノロジーが好きな人たちのお祭りである **Mini MakerFaire** シンガポールに大きなブースを構え、**OneMakerGroup** というシンガポール最大の **Maker** スペースの中にラボを構え、自らを「技術力で社会的な問題を解決する会社」と答えます。



[MakerFaire シンガポールでプレゼンする ヴェラパン]

MakerFaire シンガポールでプレゼンする ヴェラパン

■デザイン、ストーリーの力で製品を成り立たせる

#### 竹のスピーカー**iBam**

彼らは例えばこの **iBam** のようなものを作っています。これはバンドンの竹からリサイクルして作ったスマートホンのスピーカーで、アコースティックに音を広めるものです。彼らは「グリーンアンプ」と呼んでいます。

[ibam]



竹の iPhone スピーカー「iBam2」(提供:SL2)

これはいいデザインで、生成りの布で包まれて売られています。\$49 シンガポールドル(4500円ぐらい)の価格に見合うものです。

消火ホースをリサイクルする **FireUP**

[fireup]

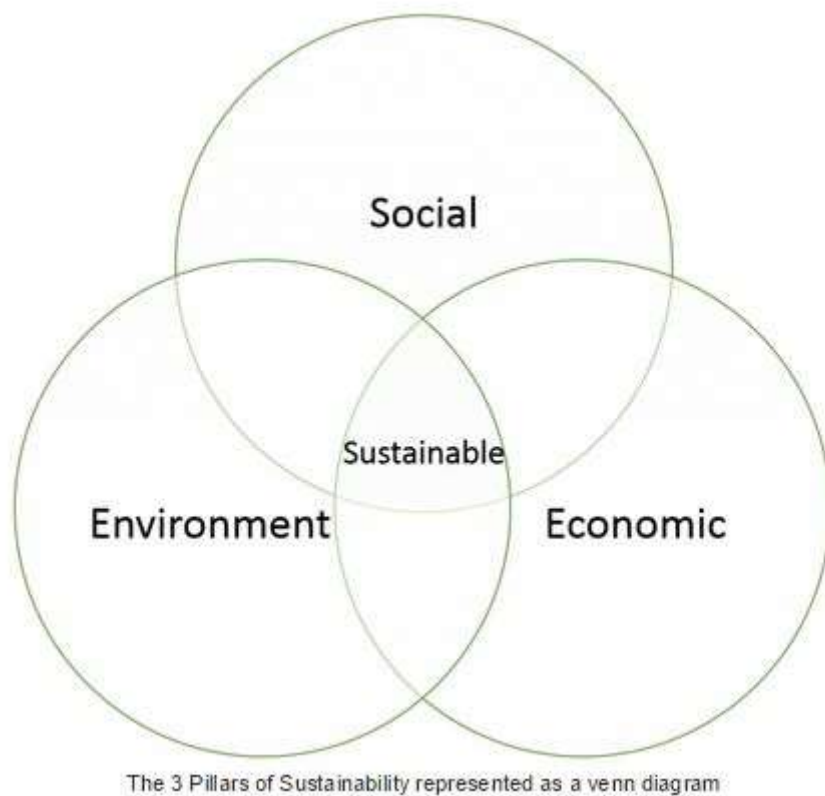


こちらの FireUP は、シンガポールの消火部隊が実際に使っていたものをパステースにリサイクルしようとしています。リサイクルの作業そのものも引退した消防士が行うようにしたい、とのこと。防火とか防衛の博物館などで、記念品として売っていくのであれば人気が出そうです。

彼らは単にリサイクルやエコロジーをするだけでなく、それを製品として成り立つクオリティまで、テクノロジーやデザインの力を借りて向上させ、収入を得てはじめて「サステイナブル（持続可能）」と考えています。素材そのものを循環させることよりも、これまでビジネスが成り立たなかったところにビジネスを興して、同じ事を続けさせることを「サステイナブル」と考えています。

social.JPG





これはサステイナブル・リビング・ラボのサイトに掲げられている彼らの活動の symbol です。社会(social), 環境(Environment),経済 (Economic) が重なり合うところに持続可能 (Sustainable) が成り立つことを表しています。

■エンジニアとして、また知財のスペシャリストとして、そして起業家として

SL2 の創業者ヴェラパンはまだ 30 歳になったばかりの起業家です。シンガポール国立大で生物工学とエンジニアリングを学びました。学校では web デザインと LAN ゲーム（ローカルでチーム対戦をするオンラインゲーム）のサークルをそれぞれ立ち上げ、軍隊では情報処理を担当、ビジネスとしてアメリカのバイオ医療会社で働き、公務員としても太平洋の違法操業に対する政策を提唱したり、国営のビジネスプランコンテストのリーダーを務めるなど、これまで、ビジネスとホビーそれぞれの分野で、様々な経験を積んできました。水政策の研究ネットワークの共同創設者でもあり、この連載でもギーク大臣として紹介した(リンク)今の水/環境大臣ヴィヴィアンとも繋がりががあります。

エンジニアおよび知財のスペシャリストとしていくつか特許を取得し、起業家としてもユネスコのビジネスプランコンテストに出場し受賞したシンガポールチームのリーダーをつとめています。

社会的な問題を解決すること、何かを作ることの両方に喜びを感じていた 2011 年、メイカームーブメントの高まりに触れ、「これで、持続可能性の問題と何かを作ることを会わせられるのではないか」と考えて SL2 を創設。同時に、シンガポールで最初のメイカースペース（Fablab、Techshop などのように、メイカーが集まって知識や機材をシェアする場所）を設立しました。

[websites12]



SL2 のサイト

「子供の頃、メカーノ（組み合わせることで様々な機構がつくれるオモチャ）とレゴのセットで遊んで、いくつか技術的なことを学んだことが、メイカーを志すきっかけになった」とヴェラパンは語ります。その後も技術的な授業やワークショップを多く選んで受講。学

生時代に、ダ임ラーとユネスコが共同で実施した大会で、インドの農民の為に太陽光乾燥機を応募したことが、技術で問題を解決する活動のきっかけになったといいます。また、2008年にアメリカ資本の医療機器メーカーの仕事のために1年カリフォルニアで働いていた際、Make:MagazineとMakerFaireに直接触れています。

米 Make:Magazine とベイエリアの MakerFaire は日本とはだいぶ異なり、かなり DIY、ヒッピー感あふれたものです。グリーンテクノロジーのために多くのスペースが割かれ、「客席がすべて自転車型発電機になっていて、客が発電する電気で演奏するロックバンド」のような出展があります。

#### ■ゼロからつくることを教える

「いまは、やりたくてたまらなかったことを仕事にしている。多くの人は生計を立てることと楽しみを得ることを別々にしているけど、幸い僕は今その二つを一緒にできている。SL2の活動も4年目を迎え、シンガポールの外側を見据えて活動を刷る段階に来ている。今のところ、ワークショップのほとんどはシンガポール内でやっているけど、呼んでもらえればどこでも行くよ。」

シンガポールはマネージメントに特化した国家のため、起業家やプロデューサは多いですが、自分が手を動かしてもの作りをする人たちは少ない国です。実際的な労働は移民が担っています。SL2はシンガポールの人たちが Make をはじめるために、まず「ノミでスプーンを掘ってみる」「ノコギリで切ってみる」というところからワークショップをはじめています。

[ノコギリ]



シンガポール **MakerFaire** で行われている、ノコギリの使い方ワークショップ。シンガポールにはそもそもノコギリを握ったことがない人が多い。

「メイカームーブメント、特にシンガポールでのそれは始まったばかりで、まだまだ、”これがメイカーだ!”という成功事例を生み出すには多くの時間がかかるけど、そのぶんすごい可能性を秘めている。**Make:**をやることで、新しい工芸品を生み出すことができるし、何より自分自身が”できる”という実感を得ることができる。」

ヴェラパンはそう話ながら、今日もシンガポール最大の **Maker** スペース **OneMakerGroup** で活動をしています。